

# 永富池 (ながとみいけ)

## 位置図



## 諸元

貯水量	356	千m <sup>3</sup>
満水面積	4.4	ha
受益面積	590	ha
堤高	23.2	m
堤長	92	m

「全くこの<sup>さびた</sup>錆田の池は凹んでいて池を造るのに適しているのだ。」(永富池告成碑より抜粋)  
明和年間(1764~1772年)、幕藩体制の厳しい中で、錆田の凹地の地形に目をつけた<sup>たかおともちか</sup>高尾知用が高松藩に築造許可を願い出て錆田池(後に永富池)を築堤しました。錆田池の名は、付近から流れ込む水が鉄分を含んでいるため、田んぼが赤錆のようになることから命名されたと伝えられています。(現在も堤防の裏面に赤錆色が各所に見られます。)

安永元年(1772年)の秋に大水により錆田池の堤防が決壊し、幾度も藩へ改修を願い出しましたが、藩財政も行き詰まっていることから聞き入れてもらえず、文政12年(1829年)にやっと高松藩執政の寛政典を最高責任者に復旧工事が始められました。延べ99,800人もの人手を投入し、天保2年(1831年)に48間(86.4m)の堤防が完成しました。池の名も、「錆田池」から「永富池」に改められ、永富神社を堤防の南の山上に祀り、年に二回神事を行い永く富み栄えるよう祈念しています。

平成6~9年(1994~1997年)には、国営総合農地防災事業で、堤体の漏水防止のためにグラウト工が施され、今は懸念であった堤防法尻の漏水もなくなり、受益地では土地利用型農業だけでなく施設園芸農業も取り組まれており、イチゴ、キュウリ等が栽培されています。



永富池



永富神社